

---

# 悪魔さんと旅人

temso

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔さんと旅人

### 【Nコード】

N4791B

### 【作者名】

temso

### 【あらすじ】

旅を続ける少年ルク。『歪んだ』世界の話。

## 第一部

小さな村の酒場。

一仕事終えたばかりの男達がわいのわいの、楽しそうに酒をcaff食らっている。怒鳴り声にも似た大声、笑い声も聞こえてくる。

そんな店のカウンター席で、ひとりちびちびとブドウ酒を飲んでいる少年がいた。

顔つきは幼く、まだ十代の半ばくらいだろうか。そんな容貌からは考えられないほど、その振る舞いは落ち着いている。

全身を麻と革の旅装束で固め、外套は外して隣の椅子に引っ掛けていた。

「珍しいな。こんなちっこいのが、一人で来るなんて」

カウンター越し、彼に声をかけてきたのはこの店の主人らしい男。

「人を待つてる」

その声も落ち着いて大人びたものだった。

「この辺のガキじゃないな。おめえ、どこから来た？」

「……さあ。忘れた」

ちらりとも視線を動かすことなく、淡々と応える。そんな様子にも主人は気を悪くした風を見せず、この無愛想な少年を覗き込んできた。

「ま、その大荷物だ。少なくとも隣町から来た、ってことはねえだろ」

「まあ、ね。あちこち、歩き回ってるから」

「へえ、旅人か」

「そう、だな」

彼は足元のバッグをちらりと見た。大振りのザックには中身がぱんぱんに詰まっている。

すべて、歩きで旅をするために欠かせない装備だ。

「若いのに大変だな」

ほらよ、と主人は彼の前にグラスを置いた。

「……………」

小首をかしげる少年。オレンジジュースの入ったグラスをついで、主人を見上げる。

「おごりだよ。ちっこいんだから酒はその一杯にしとけ」

「……………そうする。ありがとう」

少しだけ、彼は微笑んだ。

「ここの酒は、あまり美味くなかったし」

「うるせえよ」

歯を見せて主人も笑った。

オレンジジュースに手をつけて、ちびりと口に含む。酸味より甘みのほうが強い。

主人が去って、彼はぼんやりとカウンターにひじをついた。

この町に来るのは、どれぐらいぶりだろうか。

「おお、ジュースが似合ってたじゃねえか。お子様」

いきなり横手から掛かった声に振り向く。イタズラっぽい笑顔を見せて、一人の若者がこちらに手を振っていた。

「お前に言われたくない」

少年は口元を緩ませて、男のほうに半身を向けた。

「遅いぞ」

「仕事だったんだよ。……………久しぶりだな、ルク」

「ああ」

男は少年の隣に腰を下ろす。目の前にあった飲みかけのぶどう酒を見て、不思議そうな顔をルクのほうに向けてきた。

「なんだこれ？」

「俺のだよ。まずいから置いといた」

「じゃ、俺がもらおうか」

「まずいけどな」

少年のほうがちんぷん着いて見えるそのやり取りは、なんだか不自然だ。

ぶどう酒を一口飲んで男は尋ねてきた。

「今度はどこ行ってたんだ？」

「あちこち。とりあえず東の端まで行ってきた」

「そうか。……しかし、その様子じゃまた、手がかりなかったか」

「……まあ、気長にやるさ。それより」

ちらりとルクは男に目を向けた。

タバコの火。煙がもくもくと立ち上り、狭い店の中に漂う。

その男の名は、フィーズといった。

「こっからは、毎度お馴染みの情報屋さんだ。要するに、金掛かるぞ」

「知ってる。そうじゃなきゃ、こんなところに来ない」

フィーズは苦笑した。ルクとはもう長い付き合いになる。

ルクは懐から財布を取り出した。そこから紙幣を十五枚抜いてフィーズに手渡す。

「毎度。しかしお前、どうやって稼いでる？」

「秘密だよ」

いつもと同じ質問と答え。煙を吐き出して笑った。

「……つつても、あんまり役に立つかどうかはわかんねえ情報しかなかった。前金、こんだけ返しとく」

十五枚のうち十枚をルクの手の中に戻した。ルクはきよんとしている。

「前金制続けると、たまにひんしゆく買ったりするからな。お得意様にだけはちゃんとした商売してんのさ」

「すまない」

「気にすんな。……で、この半年で集まった情報なんだが」

「……」

「まず、十五年前のことだ。こっちはほとんど、進展なし。新しい情報はない」

「ということ、悪魔さんの方は」

ああ、とフィーズは頷いた。

「いたよ。一人な」

「どこだ？」

「……」

ふう、と息を吐き出す。

「この町だ。灯台下暗し、ってやつ」

「……会ったか？」

「いや。それは俺の仕事じゃない」

「そうだったっけ。……明日にでも、案内を頼める？」

「ああ、いいよ。……もう一杯、なんかおごってくれりゃあな」

さすがに残り物のぶどう酒だけでは物足りない。せっかく旧知に会えた事だし、少しくらい呑んでいってもバチは当たらないだろう。

「おっさん、オレンジジュース一つくれ」

「おい！」

変な注文をするルクに、フィーズは抗議の声を上げる。

「お子様だからな。酒はダメだ。その一杯にしとけ」

さきほどのことを気にしていたらしい。

「俺は子供じゃねえぞ」

「俺は子供だよ、どうせ」

「お前の分じゃねえだろうに……」

こつという部分は子供っぽいルクだ。

## 第二部

その村は至つてのどかな、ごく普通の集落だった。何か目新しい事件でも起これば一日で村の隅から隅まで噂が行き渡ってしまう様な。

早朝、まだ通りに人影はあまり無い。町の中心から少し外れたところを二人の人間が歩いていた。

「こつちだ」

フィーズはルクを先導してずんずん歩いていく。後ろから、歩調を少し急がせて大きな荷物を背負った少年が追いかけていった。

「もつとゆっくり歩いて欲しいんだけど」

「あ、悪い。子供の歩幅じゃ追いつけないか」

「……」

「怒るなよ」

朝っぱらから、昨夜の続きのような会話をする二人。

もつともルクの心中はあまり穏やかではなかった。フィーズがそれを知った上で彼をからかっていることも、知っていた。

情報屋とその客、という立場ではあるが、二人は昔からの友人でもあった。

「ここには何度か来たけど……」

ルクは歩きながら、まだ日の昇りきらない風景を見渡した。

街中を過ぎ、草原を横切って続いていく道。それに沿って立つ建物の数が徐々に減っていく。代わりに遠くがよく見えるようになる。

「何で、今まで気がつかなかったんだろうな」

「ま、会えば分かるさ。……正直、俺も知りたくは無かったけど」

「そうか」

つまり、悪魔さんは彼の知り合いであるらしい。

「なあ」

ふと、フィーズが声をかけてきた。

「なに？」

「お前さ、……いまさらこれを聞くのも何なんだけど、結婚とかする気ってないのか」

ルクは首をかしげた。

「フィーズ、まだ酔ってるのか？」

「違う。俺はただ」

「俺みたいなやつが、結婚だなんて考えられない……みたいな答えを、期待してるの？」

「……ルク」

「俺はまだ、何も決めちゃいないよ。少なくとも、旅を終わらせられないと」

フィーズの歩調は、すこし落ち着いていた。

「この世界をなんとかしなきゃ、俺は生きてるって言えないから」

「そっか……。頑張れよ」

「うん」

二人はしばらく、何も言わずに歩いた。そうしているうち日は上がり、すれ違う人の数が増えてきた。原っぱの道を少し行けば、また一つの集落に行き当たる。

フィーズが今住んでいるのは、ここだった。

「教会に行け。あとは一人で好きなようにするといい」

「お前は？」

訊くと、フィーズはかぶりを振った。

「俺は行かない。今夜にでも、昨日の店で会おう」

つまり顛末を聞かせる、ということか。

「わかった」

「うん、じゃあな」

今しがた来た道を、フィーズは引き返していく。彼は表向き、昨日の町で雑貨屋を営んでいる。情報屋としての仕事は彼のつてで頼



つてくる人間から、裏で引き受けていた。

彼の仕事には、あまり表沙汰にしてはならないような内容も含まれるためだ。

「さて……教会は、どこだったかな」

その集落は背の低い建物が散在するような、やはりのどかなところだった。教会といっても都市にあるような儼かな雰囲気のもではなく、町民の集会場にでもなっているような場所だろう。

伸びる道をしばらく歩く。日は随分と高くなっていた。左右には民家、通りで遊ぶ子供たちの姿も見える。

交差した道にさしかかった。

ルクはきよろきよろと周りを見回す。道がわからなくなった。

「ごめん、ちよつといいかな」

道の脇で水をまいていた少女に、ルクは声をかけた。

「はい？」

「教会ってどこにあるか、教えてくれないかな」  
すこしきよとんとしてから、少女は答えた。

「教会なら、この道を真っ直ぐ行って左に見えますけど」

「そうか、ありがとう」

「旅人さんですか？」

「ん？ああ、そうだよ」

尋ねてきた少女に、動かしかけた足を止める。

「この町じゃ、教会に行っても神父さんとか、いませんよ」

「いや、そういうのが目的じゃないから」

「違うんですか？」

懺悔や説教など以外で旅の人間が教会を訪れる理由は、普通あまり思いつかないだろう。

「ちよつとね。待ち合わせ、というか」

「待ち合わせ……。あ、そうか」

何かに思い当たったような彼女の表情に、ルクは首をかしげる。

「どうしたの？」

「最近になって、近所の娘がよく教会に行くんですけど。一人で椅子に座って、ずっとお祈りをしてて」

「……へえ」

「そうするようになって、あの娘なんだかふさぎ込んだりうようになつたから。ひよつとして、その娘の知り合いなのかな、なんて」

「……」

ルクはあごに手を当てた。

「旅人さん？」

「あ、いや。……そうだね、知り合いみたいなものなのかも」

「え？」

「いや、なんでもないよ。教えてくれてありがとう」

教わつたとおりの道を行くと、すこしして教会にたどり着いた。

周りの建物より一回り大きいだけの建物、という印象がある。

「ここか」

ルクは一步踏み出して、両開きのドアを押し開けた。

中は暗かった。長いすがずらりと並び、奥には祭壇。それだけの空間だ。

右前方、長いすに腰掛けていた人物がこちらを振り向いていた。驚いたような顔をした、黒髪の少女だった。

### 第三部

どこか幼さを残した顔立ち、長い黒髪がいくらか大人っぽさを演出している。

そういう少女が、教会の入り口に立ったルクを見ていた。

「……あの」

「……」

長いすから立ち上がって、少女はずんずんルクに近づいてきた。ルクも一歩、教会に足を踏み入れる。

彼女はルクを見ていない。その脇をすり抜けて教会を後にしようとしていた。

「フィーズ、っていう人、知ってる？」

ルクは背中越しに声をかけた。少女の足が止まる。

「その人から紹介をもらって、ここに来たんだけども」  
少女が振り返る。

「……知ってるんですか。私のこと」

「いや」

背中を向けたまま。教会の中に、独り言を言うように。

「ただ、君の境遇や、気持ちくらいはたぶん、よく分かる。他の人よりはね」

「……！」

「話がしたいんだ。少し、いいかな」

ルクは教会の奥に進んでいった。手前の椅子に荷物を降ろし、腰掛ける。

「……あなたの、名前は？」

「ルク」

「……フィーズさんから、聞いたことあります」

少女は後ろ手に教会の扉を閉めた。

埃っぽい室内が薄暗く閉ざされた。

「君の名前は？」

「アリイです」

「そう」

通路を挟んで隣り合わせ、二人は腰を下ろしていた。田舎の教会、都会のそれにあるような荘厳なステンドグラスもオルガンも無い。教義のために最低限必要な神父の存在すらない。

その空間には、どこか暗い空気をまとった二人がいるだけだ。

「紹介されたって言っても、フィーズから詳しいことは何も聞いてないんだ」

「私もです。ルクさんっていう……私と、同じような人がいるっていうことだけ」

「同じ、か。でもたぶん、君と俺は違う」

ルクは天井を見上げた。

「……ここ、好きなの？」

「……好き、っていうのは違います」

「というと？」

「人と、会わなくて済むから」

「そっか。やっぱり俺たちは、おんなじかもしれないな」

アリイはルクを覗き込む。

「人と会いたくないから、一人で教会にいる。人と会わなくて済むから、旅を始めた」

「旅をしているっていうのも、聞いてます」

「なら、目的とかは？」

「それも、知ってます」

「そう」

ルクの旅、その目的。

目的と呼べるかどうかさえ、はっきりとしない目的。

「本題に、入ろうか。君は」

「……死期」

唐突に出た単語は、どこまでも暗い響きを伴う。

「人の死ぬ、その瞬間が、見えるんです」

## 第四部

はじまりは、一年ほど前に遡る。

それは雪の降った日だった。

彼女はいつものように畑仕事を終え、いつものように家に帰った。かじかむ手をさすりながらも野菜を収穫していたことを鮮明に覚えている。

彼女には祖母がいた。祖母は高齢のため仕事に出ず、母の家事を手伝っていた。

夕食後、一家で暖炉を囲んでいたときのことだ。

暖炉の火を、彼女はアライはぼんやりと眺めていた。仕事の疲れもあつてか、いつもよりも眠気を感じていた。

夢を見た。それが夢だったのかどうか、今でもよくは分からない。夢には祖母が出てきた。目を閉じていた。寝ているのか、そう思った。

ただ、それだけの夢だった。目を覚ましたとき、そばにいた祖母を見た彼女は急に不安に襲われた。その不安の正体は、そのときはまだ分からなかった。

祖母が息を引き取ったのは、少ししてからのことだった。

棺に収まった祖母の遺体、悲しみよりも先に、驚きが立った。

夢に出てきたあの表情と、同じ。

しばらくして、今度は近所に住む女性が夢に出た。やはり彼女は目を閉じていた。

その体は、水に濡れていた。

彼女はその女性と顔を合わせることが出来なくなった。理由も言えない。言えるはずが無い。なにかの偶然だ、ただの悪夢だと自分に言い聞かせるほか無かった。

それでも、悪い予感は消えない。  
その女性がある日、川に落ちて死んだと聞いたとき。彼女は、自身の『異常』を確信した。

「それからは、人と顔を合わせるのが怖くなって」  
教会に通い始めた。ここは人がいない。神にすがって、祈るにもふさわしい。

祈ったところで、なにかが変わるとは思えなかったが。  
「それで、今も？」

「はい。……症状、と言っているのかは分かりませんが」  
人の顔を見ているとき、ふと、その死相が目に見え浮かぶことがある。だから恐ろしいのだ。自分自身が。人が。

「……そう」  
「ルクさんは」

「俺のは、そういうのじゃあない。……ひよつとしたら、この体を欲しがるようなやつすらいるかもしれない。そういうものだよ」

「フィーズさんに、聞いたとおりなんですね」

「聞いたのか……。意外に、おしゃべりなのかな」

「あの人と私が知りあったとき、聞いたんです」

「知り合った、って。妙な縁だね」

「偶然町で会ったとき、……その、『視え』なんです。フィーズさんの……その」

「うん」

なんとなく、その情景は想像がついた。フィーズは勘のいい男だ。  
「……どうしたらいいんでしょうか。私……こんなこと、フィーズさん意外に相談できなくて」

「それは誰だって同じだよ。どうしたらいいか、分からないんだ」  
そんな方法があるなら、アライや自分のような者は存在しない。

「アライ、俺が『視え』る？」

「……嫌です。見たくありません」

「いいから。……たぶん、君の見たくないものは見えないはず」  
「え……あの」

アリイはルクの目をじつと見た。恐る恐る、という感じで。しばらくして、アリイはルクから目を逸らした。

「分かりませんでした……」

「やっぱり、ね」

「フィーズさんに聞いたとおりでした」

うん、と一つ頷いてから、ルクはアリイを見た。

「あのさ、アリイ」

「……なんですか」

「君は、何かをした？」

「え……」

「その目を疎んでここに逃げ込んで、それ以外に何かをした？」

「……なにも、していません」

「何かしてみれば、その死期もひよつとしたら変えられるんじゃないのかな、って、今思った」

「……そんなの、たとえいくら死期を延ばせたって……いつ死ぬか、私には分かってしまう。意味、ないじゃないですか……」

「そうかな」

アリイの声は震えている。

「誰だって、自分がいつかは死ぬってことを分かかって生きてるんじゃない？」

「ルクさんが、それを言うんですか」

「……ごめん。でもね」

ルクは長いすを立った。

「都合のいい話かもしれないけれど。俺はこの体のおかげで、旅をしていたおかげで、いろいろなことが分かったよ。知り合いも出  
来たし」

「……それで」

「フィーズとも知り合えた。君もそう、だよね」



「だからって」

「悲観するなかれ、道は常に前を向く。叱るわけじゃない、そんな資格も俺にはない。でも、哀れむつもりもない」

「……」

「その運命に、ぶち当たってみなよ。怖いけど、辛いけど、そのまま朽ちるよりはずっとましだ」

「無責任なことを、言わないで下さい」

「……ごめん。でも、俺はそうしてる」

荷物を背に負う。

「……こうやってあちこち回って、この世界を何とかできないか、探してる」

「ルクさん……」

ドアに手をかけて、ルクはひとこと、つぶやいた。

「俺はこの世界、嫌いじゃないから」

旅の中で得た、結論。

## 第五部

それはルクがフィーズのもとを訪れる、少し前。

彼は乗合馬車に揺られていた。北の町へ向けて、景色はその色を徐々に薄くしていく。

車内は狭い。向かい合わせに置かれた席は四人乗りが限界で、幅もない。

向かいには一人の婦人、三十代ほどか。

がたごとと揺れる景色を、ぼんやりしながら見ていた。

「あら、雪」

婦人が言った。ルクは空を見上げる。

灰色の空に、白く点々とした模様が生まれていた。

「寒いわけだわ。早くジエンラに着かないかしら」

息を吐く。白い。

「旅人さん、これどうぞ」

「ん？」

急に水を向けられてルクはちょっと戸惑った。

「はい、これ」

そう言っただけで女性が差し出したのは飴ひとつ。にこりと笑っていた。

「……どうも、ありがとう」

飴を受け取って口に放り込んだ。甘いものを食べるのは随分久しぶりになる。

「おいしい？」

「おいしい？」

「うん、なんだか、懐かしい感じ」

「懐かしい、だなんて。かわいらしい」

彼女は声を出して笑った。見た目幼い少年には懐かしいという言葉が似合わないのだろう。

「……本当だから」

「あなたは何をしに行くの？」

馬車の目的地、ジエンラはこの先雪に包まれる、北方の町だ。

「別に、なにをするわけでもないよ。旅の途中なんだ」

「その若さで？ 大変ね」

「そうでもないよ。慣れれば」

「へえ……。てつきり、商人さんかとばかり思ってたわ」

「商人、ねえ。物を売ることもあるけど」

旅の途中、路銀を稼ぐために彼はいろいろと工夫を凝らす。単純に働いて金を溜めることもあるし、その金で仕入れたものを売って歩くこともある。

「でも、今の時期からジエンラに行ったら帰れなくなるわよ？」

冬の時期、ジエンラは文字通り雪に閉ざされる。毎年降る豪雪のせいで、外との行き来がしづらくなるのだ。

「まあ、何とかなるんじゃないかな」

飄々とルクは言う。閉ざされるといっても、完全に出られなくなってしまうわけでもないだろう。

「おばさんは？」

「あたし？ あたしはジエンラに帰るところさ。買出しに行つたの」

床に置いた紙袋をがさりと持ち上げてみせた。入り口付近まで物が詰まっている。

「冬を越すためにね、こうやっていっぱい買いだめしておくの」

「へえ」

「それにしても、大変ね。その若さで旅なんて」

「どこへ行つても言われるよ」

「でしょうねえ、と婦人は笑った。

「そうだ、おばさんがジエンラの人なら、聞きたいことがあるんだけど」

「なあに？」

「だいぶ前に、ジエンラで悪魔が出たとか噂が立ってね。信じち

やいないけど、気になったから」

「悪魔？ …… ああ、フルムさんのことかしらね」

「知り合いなの？」

ルクは婦人の顔を覗き込んだ。

「知り合いつてほどじゃないよ。村の人だからね」

「それが、悪魔さんとういう」

「悪魔さん？」

妙な呼び方に首をかしげる。

「あ、いや、なんでもないんだ」

「そう？ ああ、フルムさんね。五年位前、ふらりと村から出て行ったおじさんでね」

「出て行った？」

「そう。出て行く前から様子がおかしくてね。医者や神父様に見せようかって、家族の人が相談してたりしたの」

「それで？」

「そのときの彼の言動がどうにもおかしかったから、村の意地悪い連中が悪魔だ、悪魔だってフルムさんをからかったの」

「そうしたら、出て行ってしまったと？」

「そう、と婦人は頷いた。

「今思えばね、たしかにおかしな人だったわ。突然わめき散らしたり、泣き始めたり、道端の木におびえたり」

「悪魔、か」

ルクがつぶやいたそのとき、馬車が急に動きを止めた。

「どうしたのかしら」

窓から外の様子を確認しようと、婦人は身を乗り出す。その彼女をルクは制した。

「いい、動かないで」

「え？」

「少し、待っていて」

それだけ言って、彼は馬車の扉を押し開けた。

## 第六部

合計、五人の男たち。手に手に剣を、棍棒を持ち、下卑た笑みを浮かべている。

馬車の行く手をさえぎって立ちはだかった彼らのうち一人が、馬車から降りてきた少年を見てさらに笑った。

山賊。

「なんだ、ガキか。稼ぎにならねえな」

「そうでもねえさ。馬がある」

この山中に賊が出ると聞いたことはなかった。そうでなければ、護衛の兵が一人でもいていいはずだから。

御者はおびえ切っていた。本来ならここで馬を止めてはいけなかったのだ。

「おい、坊主。まさか手ぶらで旅してるってことはねえだろ。荷物取って来いよ」

一人が歩み寄ってきた。御者がルクのほうを見て、逃げる、と叫んだ。

「黙ってる」

剣を突きつけられて、御者は沈黙する。刃はこぼれてもはや斬ることが出来るかどうか、といった武器に成り下がってはいても、凶器は凶器。

ルクは動かなかった。静かに彼らを見据え、微動だにしない。

婦人が心配そうにその様子を見ていた。

「おい、こら」

無造作に、男は剣先をルクに突きつけた。

「できればそのまま、帰ってはくれないか」

ルクの発した言葉に、男は一瞬固まる。それから声を上げて笑い出した。

「はは、お前、かつこいいな！」

その男の笑い声が、ぴたりと止んだ。

ルクがその刃を無造作に挿んだからだ。

「同じことを何度も言いたくない。頼む、帰れ」

「て……てめえ！」

男は剣を振り上げようとした。刃を握った手から血が滴る。

「帰れ」

ルクの手が刃を放す。同時に男は凶刃を振り下ろした。

真一文字の剣閃、後ろに退いてそれをかわす。

「死ね！」

振り下ろされた剣はそのまま横薙ぎにルクを襲った。

切れの悪い刃が、ルクの体に食い込む。

鮮血の迸り、刃は赤に染まった。

そして

「帰れ」

少年は倒れなかった。斬られ、血を流し、それだけ。

「な……」

男が驚愕を顔に浮かべて、自らの剣とルクを見比べた。

どうあっても立っていられるはずもない重傷を負って、ルクは一

歩一歩男に向けて歩み寄る。

「く！」

再びの斬撃。それをルクは、左腕で止めた。骨に食い込んだか、

血を吹いて刃は止まる。

全身を血まみれにしながら、ルクは右の拳を振り上げた。

驚きに目を見開いた男の顔面に正拳を叩き込む。

「がつ！」

のけぞって男は倒れた。一撃だ。

男の取り落とした剣を拾い上げ、残る四人に向かってルクは歩き出した。

「帰れ、と言った」

「くそっ！ 化け物！」

二人が一斉に襲い掛かってくる。棍棒の一撃を剣で受け止め、突き出された槍をかわす。

槍を持つ手を蹴り上げた。その隙にルクは剣を手放す。棍棒の男はバランスを崩した。

取り落としかけた槍を奪い取り、石突を鳩尾に突き入れる。

間髪入れず振り下ろされた棍棒を穂先で受け止めた。

「な、なんなんだ！ お前はっ!?!」

「……悪魔」

ぼそり、と呟いた声は届いただろうか。

長い槍を振り、男の首筋を殴打した。吹き飛んで白目をむいた男には目もくれず、ルクは残った二人を睨み据えた。

「帰れ」

山賊は射すくめられたかのように、その場に立ち尽くした。

## 第七部

体中を血だらけにしながら、ルクは仲間を引きずって逃げていく盗賊を眺めていた。

「お、おい。大丈夫か!？」

明らかに重傷を負っている少年に御者が駆け寄る。

「……大丈夫」

「大丈夫なわけ……!」

ルクはかまわず、歩き出した。足取りは少しも揺らがない。

彼のそんな様子に、御者は言葉を失った。

馬車の中から、婦人が降りてくるのが見えた。御者と同じようにこちらを見ていたが、彼女は意を決したように声をかけてくる。

「……大丈夫、なの？」

「うん……」

ルクは左腕を掲げて見せた。

傷口は、すでに消えていた。流れた血はそのままに傷跡だけがない。

「あなた……」

「こういう、体なんだ」

だから、彼は言った。悪魔だ、と。

「こんなじゃ、村には行けなさそうだね」

「……」

彼女は何も言わなかった。この少年がまともな人間ではない、それぐらい誰にだって分かる。

世間には一般に、悪魔や魔女が存在する、とまことしやかに語られる。

それは異端の人間を指す言葉として、半ば揶揄を含んで使われる。しかし彼にとって、それは冗談でもなんでもない。

彼の存在そのものだ。



「あなた……悪魔、つて……」

「……俺みたいな人、他にもいるかなって。そう、思っただけ。そう、こんな類の視線は今までいくらでも浴びてきた。」

悪魔。

かつて彼が住んでいた村の人間は、こう言った。

ルクは婦人の脇を通り抜け、馬車に乗り込んで荷物を背負った。

また歩きの旅だ。

「……どこへ行くの？」

歩き出そうとした彼に声がかかる。どういふ感情を内包しているのか、それはよくわからない。

「とりあえず来た道に戻るよ。おばさん達の村にはもう、行けそうもない」

「……」

「じゃあ、ね。できれば俺のことは、役人に言わないでくれると嬉しいかな」

きびすを返したルクの背に、再び婦人が言った。

「待って」

「？」

「……ありがとうね。こんなことを言うのもおかしいかもしれないけど」

ルクは振り返らなかった。

「気を、つけてね」

「うん」

## 第八部

昨夜と同じバーで、ルクはフィーズと落ち合った。

彼はすこし、焦れたような、疲れたような、そんな表情をしていた。

「アライ、何て言ってた？」

グラスを受け取ってすぐ、フィーズの口を突いて出たのはこんな言葉。

「なにも。悪魔さんだつてことは、わかった。いつもと同じ」

「そうか……」

ちびり、とフィーズはグラスを傾けた。

アライとフィーズ、二人がどういう関係なのか。それを勘ぐる気はルクにはない。なんとなく想像はつくものの、それは二人の問題だ。

「……アライはさ。なんか、昔のお前みたいに見えたんだよ。最

初

「……」

「お前と会えば、なにかが良くなるかもしれないって。そう思ったんだ」

「それは俺も、おんなじだよ」

ルクはこれまで、何人かの『悪魔さん』に会ってきた。アライやルクのような人間はそれぞれ違う種類の呪いのようなものを持っている。

そしてそれが何故なのか、まったく分からない。

「……俺も、お前と一緒に行きたいと思ってた」

「それはダメだよ」

「わかってる。それに、今はアライのこともあるし」  
フィーズは真っ直ぐ、ルクを見た。

「協力はしていく。お前が、悪魔さんが元に戻るまで」  
それは途方もない大海原にいかだを漕ぎ出すようなものなのかも  
しれない。

「分かってるよ。俺自身のことでもあるしな」  
世界は歪んでいる。

歪んだ者の存在を許している。  
だからルクは、旅をしている。

「とりあえず、今日は飲め」  
いつものような顔に戻ってフィーズがグラスを掲げた。

「うん」  
ルクもグラスを掲げる。

ちん、とガラスの音が鳴った。

## 第八部（後書き）

いろいろと説明の足りないところだらけでしたが、これで一応の締めです。

酷評でもなにか感想をいただけたら、幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4791b/>

---

悪魔さんと旅人

2010年10月21日22時31分発行